

50 音図の話

まず最初にアルファベットを習ったときのことを覚えていますか？abcd ってなんでこんな順番なんだろうと思いませんか？わけのわからない順番で覚えにくかったですね。では外国人が日本語を勉強しているときに「あかさたなはまやらわ」の順番について聞かれたことはありませんか？外国人には我々にとってのabcdと同じくらいわけがわからない順番ですね。でも、「あかさたなはまやらわ」と「あいうえお」つまり50音図にはちゃんとした科学的な理屈に従った順番で並んでいるんです。

まず、次の表を見てください。

サンスクリットの50音図

母音

単母音	a	ā	i	ī	u	ū	ṛ	ṝ	ḷ	ḻ
二重母音	e	ai	o	au						
特別母音	am̐		aḥ							

子音

	無声無気	無声有気	有声無気	有声有気	鼻音
軟口蓋音	ka	k ^h a	ga	g ^h a	ṅa
硬口蓋音	ca	c ^h a	ja	j ^h a	ñā
反舌音	ṭa	ṭ ^h a	ḍa	ḍ ^h a	ṇa
歯音	ta	t ^h a	da	d ^h a	na
唇音	pa	p ^h a	ba	b ^h a	ma
半母音	ya	ra	la	va	
摩擦音	śa	ṣa	sa		
気音	ha				
結合音	kṣa (本来独立した音ではなく、50音と数をそろえるときにだけ入れられます。)				

そう、実は50音図の起源はインドのサンスクリットに関する音韻学的分析にあるのです。四角で囲んであるのが日本語と関係のあるところですから、そこを中心に説明します。まず母音の順番ですが、もっとも緊張の少ない「あ」が最初で、唇の両端をひっぱる「い」、唇をぐっと突き出す「う」と緊張させる位置が後ろから前へと並びます。サンスクリットでは「え」と「お」は単純な母音ではなく「え」はa+i「お」はa+uからなる2重母音と分析されますから、その後に来るのです。

次に子音ですが、これも母音と同様に、音の特性を決める場所(調音点と呼ばれます)が後ろから前へ、というのを基本として並んでいます。(次ページの図を参照してください。)

軟口蓋音「カ」行の音は舌の根本が軟口蓋につけられて発音されます。硬口蓋音(「チャ」のような音)は舌の真ん中から舌先にかけてを口の上部に押しあてながら発音されます。反舌音は舌の先をそらして硬口蓋に触れて発音します(日本語にはありません)。歯音は舌先を歯につける音で「タ」行の音です。唇音は唇を閉じて開く音で「パ」「バ」「マ」などです。

これに音が濁っているか(有気音)あるいは氣息を伴っているか(有気音、小さな「ハ」のように息が抜ける)あるいは鼻に抜けて鼻音化しているかという5種類の区別を掛け合わせて25種類の子音を配列します。次に「い」の半母音である「ヤ」、「う」の半母音である「ヴァ」、またサンスクリットではṛとḷの母音の形があるので、ṛとḷは半母音であると分析されます。最後に摩擦音、気音が来るというサンスクリットの音韻を科学的に分析した順番に並んでいるのです。インドでは紀元前3世紀にはこうした分析が確立していました。

奈良時代から平安時代初めにかけての仏教僧たちは、仏教と同時にこうしたサンスクリットの音声学の知識も学びました。特に、真言密教の開祖である弘法大師空海は深く学んだと言われています。古い時代の日本語では、濁音を表す濁点や半濁点が無かったことから解るように子音の清濁を書くことはなかったので、子音をサンスクリットの50音の順番にならべて、「かさたなはまやらわ」の順番が決まりました。「わ」と「ヴァ」が実質的に同じ音であることはすぐ解りますが、「さ」と「は」については違うのでは、と思われるでしょう。

しかし、国語学の研究によると、古い時代の日本語では、「さ」行の音は「ちゃ」あるいは「つぁ」と発音されていたことが解っています。また、「は」の音が江戸時代の初めまで「ぱ」（あるいは「ふぁ」）だったことは、「父には一度も会わず、母には二度会う」という謎々（答えは「唇」、「母」は「ぱぱ」と発音されるので唇が2度くっつく）の例からも明らかです。もう一度、サンスクリットの50音図を見て、四角でかこんだものが「あかさたなはまやらわ」に対応していることを確認してみてください。

